

NPO 法人 森林再生支援センターニュース

特定非営利活動法人 森林再生支援センター 理事長 藤田 昇
〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5
TEL 075-211-4229 FAX 075-432-0026
URL : <http://www.crrn.net> E-mail : info@crrn.net

都市と森と川をつなぐ^{あまわかこ}～天若湖アートプロジェクト

森林再生支援センター専門委員
下村泰史（京都造形芸術大学）

1. はじめに

「天若湖アートプロジェクト」は、京都府南丹市日吉町にある日吉ダム近傍において、2005年より毎年夏に開催されているアートプロジェクトである。その中心をなすのはダム湖に水没した5つの集落を、「あかり」を湖面に配置することによって再現する大規模なインスタレーション「あかりがつなぐ記憶」である。

「あかりがつなぐ記憶」は、市民参加による直接的な風景づくりであり、またプロジェクト自体が流域の環境保全に関わるコミュニケーションを惹起する社会的なプログラムでもある。

森林環境保全においても川との関わりや流域のさまざまな市民の間での合意形成は重要な課題であり、本プロジェクトは2009年以降、NPO法人森林再生支援センターの後援を受けてきた。本稿では流域連携活動と地域系アートプロジェクトの複合体である「天若湖アートプロジェクト」について報告し、森林環境保全における上下流・多セクター間コミュニケーションの可能性について考えるきっかけとしたい。

著者は本プロジェクトにおいて実行委員長等の要職を務めてきた。本稿では、そこでの参与観察で得た情報を活用しつつ、プロジェクトの特徴を描出する。その上で地域間交流の観点からプログラムの分析・評価を試み、流域内コミュニケーションにおける空間・風景その他の資源の編成手法について考察する。

2. プロジェクトの背景

後述するように「天若湖アートプロジェクト」は、流域環境保全団体とアートNPOの協働によって運営されており、「流域連携活動」と「地域系アートプロジェクト」の2つの側面を持つ特異なものとなっている。ここではその双方の流れを整理しておく。

(1) 流域環境保全とコミュニケーション

1) 流域連携活動の流れと「議論のルール」の整備

日本の水や水辺を巡る市民活動は、行政が行う公共事業に対する「闘争」「反対運動」という形を取ってきた。1984年の「第1回世界湖沼会議」を機に、各地の住民間の情報の共有の必要性が確認され、1985年より「水郷水

都全国会議」が開催されるようになった。当初は闘争的な色彩が強かったといわれる同会議だが、行政担当者や専門家も交えた場合は、「対立から提言へ」¹⁾へと変容していく。一方で、水環境についての問題は、治水、利水、環境のどの観点からも当該地域だけの解決はあり得ず、利害を異にする上下流との関わりを考えた上での合意形成が不可欠であるという認識が広がり、1993年以降「全国水環境シンポ&交流会」（第1回は草加市で開催）が開催されていくこととなる。

「全国水環境シンポ&交流会」は、具体的な問題の解決を目指し、上下流の市民や専門家、行政の担当者などが、率直に意見を交換できる「テーブル」を用意するものであった。特に注目すべきは、そこでの立場を超えた平等な議論のために、「3つの原則、7つのルール」²⁾という、議論のためのルールが定められたことである。ここからセクターを超えた流域における合意形成という形で、コミュニケーションが明瞭に意識されることになる。流域住民の意見を反映させる規程を持つ改正河川法（1997年施行）や、それに基づく淀川水系流域委員会（2001年設置）も、そうした流域での合意形成を、公的な政策決定の場で行うためのものであった。また民間レベルでも流域連携活動は盛んになり、各地で「流域ネットワーク」が結成され、沿川での市民活動を相互に繋いでいくようになった。

2) 造園学その他の研究領域における「流域」の取り扱い

造園学において「流域」は、環境情報のマッピングやそれを通じた環境管理計画の策定手法に関する研究の中で、主に地域環境の客観的な空間単位として取り扱われてきた³⁾。一方で環境社会学分野では、地域住民の「日常的な知」を擁護する生活環境主義の立場から、開発プロセスの分析が行われてきた。こうした研究は水辺環境問題におけるプレイヤーやその環境観の多様性を抉出し⁴⁾、流域連携活動にも大きな影響を及ぼしてきた⁵⁾。ここでは、流域はそこに暮らす人々の共同主観的な環境観を踏まえる形で捉え直されている。近年では、造園学においても流域内の市民活動のネットワークに着目した研究が行われて

いる⁶⁾。

3) 桂川流域における流域連携活動の動向

天若湖アートプロジェクトが実施されている桂川は、京都市左京区に源流を発し、南丹市、亀岡市、京都市を経て、八幡市付近で木津川、宇治川と合流して淀川となる。淀川水系の一大支流でありその1,100km²に及ぶ流域は京都府域にほぼ収まる（図-1）。



図-1 桂川流域図

桂川流域では1990年代までは河川環境保全活動は散発的にしか行われてこなかったが、近畿3府県で開催された第3回世界水フォーラムを機に、2003年に桂川流域ネットワークが結成され、そこから2005年には天若湖アートプロジェクト、2008年には保津川復活プロジェクトが定常的な活動を開始した。2008年にはNPO法人プロジェクト保津川が結成され活発な活動を展開している。現在は多団体が連携して河川美化、調査研究、普及啓発といった活動を行っている。

(2) 地域系アートプロジェクトの動向

1) 地域系アートプロジェクトの多様性

近年、美術館等の単独の会場ではなく、一

定の広がりをもつ地域において同時多発的に美術作品の展示やパフォーマンスアートの上演を行う、地域系アートプロジェクトと呼ばれる企画が多く開催されるようになってきた。大規模で著名なものとしては、大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ(新潟県、2000年～)、横浜トリエンナーレ(横浜市、2001年～)、瀬戸内国際芸術祭(瀬戸内海、2010年～)といったものがある、小規模なものも各地で多数開催されている。この分野で際立った動きとしては、アサヒビール芸術文化財団による、「アサヒ・アート・フェスティバル(以下「AAF」と略す)」が挙げられる。これは全国各地で自立的に動いている比較的小規模な地域系アートプロジェクトに助成するとともに、それらをネットワークで繋ぐものである。毎年多数のプロジェクトがこのAAFに参加するが、その活動形態やコンセプトは、アーティストが牽引し地域性については特に顧慮しないものから地域振興を目的としたイベント性の強いもの、現代美術を中心としたものから地域の伝統に注目したものまで多岐にわたり、典型が取り出せないほど多様である。

2) 地域系アートプロジェクトに見られる共通点

しかしながら、多くのプロジェクトに共通する特徴を見出すことができる。

第1点は、何らかの形で市民参加の仕組みを持っていることである。AAFに参加しているプロジェクトは、もとより市民による自主的な活動がほとんどであるが、大規模なものにおいても、越後妻有の「こへび隊」に見られるような、ボランティアの仕組みを取り込むようになってきている。第2点は仮設的な作品の台頭である。1990年代を中心に都市再開発等に併せて実施されたパブリックアートの作品が恒久的なものであったのに比べ、仮設型の空間アート(インスタレーション)が多い⁷⁾。第3点として、田園地域への展開とその風景や風土性の重視が挙げられる。2001年の越後妻有アートトリエンナーレの成功以降、先端的な都市地域ではなく、田園地域を舞台としたプロジェクトが多く開催されるようになった。近畿圏に限定しても、木津川アート

(京都府木津川市)、西宮船坂ビエンナーレ(兵庫県西宮市)、風と土の工藝 in 琵琶湖高島(滋賀県高島市)等が、2010年以降開催されている。これらにおいては、開催地域の里山風景や風土的なものが、作品制作と鑑賞を支える重要な要素となっている。

天若湖アートプロジェクトにおいても、この3つの特徴を見出すことができる。

3. 天若湖アートプロジェクト

(1) 桂川流域と天若湖アートプロジェクト

日吉ダムは、桂川(図-1)の上流域京都府船井郡日吉町(現・南丹市日吉町)に、水資源開発公団(現・独立行政法人水資源機構)によって設置され、1998年より管理開始されているダムである。1961年に計画が発表されて以来30年余の闘争と折衝の後、5つの集落が水没し、さらに2つの集落が廃村となった。これらの集落の住民の多くは日吉町内、亀岡市、京都市西郊などに造成された集団移転地に移転した。一方新しく生まれた湖面についても、幅広い市民による利活用が求められることとなった。

天若湖アートプロジェクトは、こうしてできたダム湖「天若湖」を舞台に2005年より毎年執り行われてきた。アートプロジェクトとしては、新しく生まれた公共空間である「湖面」の、新しい市民的利用の発見と提案を、河川環境保全・流域連携活動としては、アートを通じた上下流の流域市民間の共感形成を目指してきた。

(2) 実行委員会の構成

天若湖アートプロジェクトは、多様な市民からなる実行委員会によって運営されている。実行委員会には、アートNPO(アート・プランまぜまぜ)、河川環境保全団体(桂川流域ネットワーク、プロジェクト保津川)、流域内外の大学(京都造形芸術大学、京都市立芸術大学、摂南大学、京都学園大学、大阪商業大学等)の教員及び学生有志、流域のミュージアム(亀岡市文化資料館、南丹市日吉町郷土資料館)の学芸員、保津川下り(保津川遊船企業組合)の若手船頭有志、地域のアーティストといった多彩な顔ぶれが実行委員会に参加してきた。また京都市や京都府といった地元

自治体の後援の他、河川管理者である（独）水資源機構からは、基準浮子の設置等の測量作業などの技術的な支援を受けている。

（3）中心プログラム「あかりがつなぐ記憶」

大規模インスタレーション「あかりがつなぐ記憶」は天若湖アートプロジェクトのきっかけとなり、今もなお中心であり続けているプログラムである。

これは、ダム湖に水没した5つの集落について、その各家屋があった場所の真上にあたる水面に「あかり」を浮かべることによって、当時の集落の家の並びを再現するというものである。一戸一戸の家屋は、一個の光の点によって示され、一切のディテールは省略されるが、道沿いに並ぶ家々等、集落の空間構造を可視化される。人気のない山間部のダム湖であり、日が暮れた後、星空と黒々とした山々のもとに広がる漆黒の湖面に、これら村の灯が横たわることとなる（写真-1、図-2）。

全集落を点灯再現した場合、その全長は4km近くに及び、きわめてスケールの大きなインスタレーションとなる。2005年度においては2集落の点灯再現に留まっていたが、測量プロセスなど作業手順の見直しや、湖面に浮かべる「あかり」装置の改善などにより、2009年度及び2011年度には全5集落、約120戸の灯をともすことができた（表-1）。



写真-1 点灯再現された世木林（手前）及び宮村（奥）

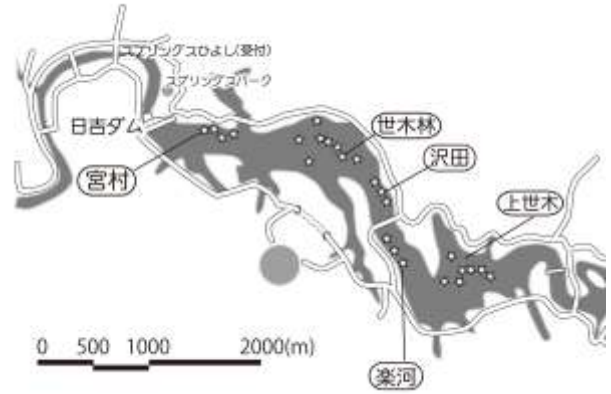


図-2 集落配置模式図

1) コミュニケーションのアートとして

「あかりがつなぐ記憶」はそれ自体美しい風景作品として、アースワークの流れの中に位置づけることもできるが、同時に、コミュニケーションのアートでもある。下流都市（亀岡市、京都市、大阪市など）からアートプロジェクトとして観覧に来る人々と、水没集落を中心とした上流地域の人々との間で、その風景に触発されたコミュニケーションが引き起こされることを想定している。そうした機会づくりのために、毎年ダム湖を周遊して各集落の夜景を観覧するバスを用意している。

2007年度には、水没集落の風景画を描いた画家井上辰夫氏の回顧展が南丹市日吉町郷土資料館で開催されたのに併せ、旧住民の方々に集まっていたいただき、下流からの参加者と「あかり」を観覧する交流会を実施した。そこに暮らした人々が「あかり」が示す村の一戸一戸を指し示しながら、水没前の風景や出来事について、熱心に語る姿が見られた。それは下流から参加した市民たちのみならず、企画側にも強い印象を残した。

2010、2011年度においては、2日間の会期中に約300名の来訪があった。2010年度に大阪商業大学原田ゼミによって実施されたアンケート調査によれば、1時間から1時間半かけて到達している近隣大都市（下流域）からの来訪者が1/4を占めること、約4割の来訪者がリピーターであることがわかった⁸⁾。

2) 実現までのプロセス

「あかりがつなぐ記憶」の原型となるもの

は、桂川流域ネットワークが 2004 年に公募した湖面利用アイデアコンテストに寄せられたものである⁹⁾。この素案は、評価を集め入選を果たした。このプランの可能性に着目した NPO 法人アート・プランまぜまぜによって、2005 年度にこれを実現するための資金が用意された¹⁰⁾ことから、この計画は「天若湖アートプロジェクト」として実現に向けて走り出すことになった。

この時点において、「あかりがつなぐ記憶」のコンセプトは完成していたといえるが、そこには、この巨大なインスタレーションをどう実現するかといった技術的な提案は全く含まれていなかった。発光方式、水面に据えるための測量と固定の方法については実行委員会内部で直前まで検討が行われた。発光方式については太陽電池の充電と LED での発光による電気式が採用され今に至っている。家屋の位置を割り出す測量については、河川管理者である水資源機構日吉ダム管理所が座標値に基づき基準となる浮子を設置することとなった。

(4) プロジェクトのこれまで

「天若湖アートプロジェクト」は、「あかりがつなぐ記憶」を中心としつつも、さまざまなプログラムを併催してきた。その規模や開催時期の概要を表-1 に示す。

気象条件等の影響も受けながら、点灯再現される集落の数は、年を追って増加してきた。これは「あかり」のコンパクト化や設営の効率化などの技術的な進歩によるところが大きい(写真-2)。

公募による市民参加のプログラムは、2006 年のイルミネーションに始まり、2008 年度以降は「あかりがつなぐ記憶」観覧会場の足元灯づくりの子どもワークショップ(以下「WS」と記す)として定着している。2011 年度は、鮎漁が盛んだった地元歴史を踏まえた、鮎形の足元灯づくりとなり、流域的なテーマの深いものとなった。

サイドプログラムには「あかりがつなぐ記憶」と関連しながら、地元や流域の環境や伝統を伝えようとするものと、アートとしての自由な表現を重視したプログラムとに大きく分けられる。アートプロジェクトらしさとい

う点から、後者に期待する意見は常にあったが、その中にはプロジェクトにおける必然性が乏しいと批判されるものもあった。表現の広がりやテーマの求心性を巡っては常にジレンマがある。どのような表現が、このプロジェクトの本質と関わり得るのか、それが惹起する交流の在り方も含めて検討すべきだというのが現在の実行委員会の方針であり、表現系プログラムは、数としては徐々に絞り込まれてきている。

2011 年度には新しい市民的湖面利用の創造という原点に戻り、アーティストによる湖面利用アイデア展を実施した。これは流域的観点とアートの観点を両方を備えたものである。

表 - 1 天若湖アートプロジェクトのこれまで

年度	主要プログラム「あかりがつなぐ記憶」点灯集落
主要行事の会期	水没集落および流域関連プログラム 表現系サイドプログラム
2005	宮村, 世木林
8/27(土)	水没集落写真展(新保隆久展), 周遊バス運行 ダンスパフォーマンス, 音楽ライブ, 舞踏, その他
2006	宮村, 世木林
8/18(土)	周遊バス運行 堤体イルミネーション(市民参加)
2007	世木林, 沢田, 楽河
8/19(土) ほかに秋季日程あり(学生展)	水没集落絵画展(井上辰夫展), 水没集落住民交流会, 水没集落記録映像作品, 周遊バス運行, 復活WS 会場イルミネーション(市民参加), 学生展
2008	宮村, 世木林, 沢田, 楽河
8/9(土)	周遊バス運行, 京都からのバスツアー, 子どもWS, 学生展 音楽ライブ, 水辺活動WS
2009	宮村, 世木林, 沢田, 楽河, 上世木(全集落)
8/8(土) ~8/9(日)	周遊バス運行, 京都からのバスツアー, 子どもWS, 学生展 音楽ライブ, 水辺活動WS, ライブペインティング, アートWS
2010	宮村, 世木林, 沢田, 楽河
8/7(土) ~8/8(日)	子どもWS, 周遊バス運行, 学生展 水辺活動WS, アートWS
2011	宮村, 世木林, 沢田, 楽河, 上世木(全集落)
8/6(土) ~8/7(日)	湖面利用アイデア展, 子どもWS, 周遊バス運行, 京都からのバスツアー 湖面利用アイデア展, 水辺活動WS

流域連携活動としての評価は高まりを見せており、2010 年には「第 3 回いい川・いい川づくりワークショップ」(主催:いい川・いい川づくり実行委員会)において、全国の河川環境保全プロジェクトより、準グランプリに選出され、2011 年には韓国蔚山大学で開催された「第 10 回韓国川の日大会」(主催: Korea River Network 及び第 10 回韓国川の日大会蔚山組織委員会)にて先進事例としてプレゼ

ンテーションを行った。

アートプロジェクトとしては、2009年以來AAF参加団体との間でスタッフの交流が行われているが、外部からの大きな評価を得るには至っていない。



写真-2 学生による設営風景

4. プログラムの構成要素とその地域性についての考察

天若湖アートプロジェクトは3層の地域性をもつ。第1層は水没してしまった地域「天若」である。「あかりがつなぐ記憶」における「地元」であるが、既に現存しないという点で特異である。第2層は天若湖が存在しイベントが行われる南丹市日吉地域である。通常の意味での地域振興の対象としての「地元」にあたる。第3層は桂川流域である。

このそれぞれの層が、「人々」「資源」「空間・風景」を持っている。これらを表現（メディア）がどのように繋ぐかが、そのプログラムの形を定めることとなる（表-2）。

表-2において、縦の列にそって「人々」「資源」「風景・空間」を繋ぐプログラムを構想すれば、「水没地域」「日吉」「流域」といったそれぞれのスケールの地域のうちに自律したものとなる。一方、表-2の各列を横断するように繋ぐプログラムを構想すれば、層を超えた交流形のものになる可能性が生じる。

表-2のマトリックスを単純化し、要素のカテゴリーを表-3のように名づけることで、プログラムがどの層に属する要素によって構成されているかを捉えることができる。例えば「あかりがつなぐ記憶」は表-4のように整理できる。

表-2 天若湖アートプロジェクトの要素群の例

	水没地域（天若）0	周辺地域（日吉）1	桂川流域2
人々 People	(現在)なし 日吉町内(保野田など)に移転した人々	殿田, 田原, 胡麻など別集落の人々	京都市, 亀岡市, 京北町域の一般市民, 京筏組など市民参加グループ, 山国・黒田など上流有地域志
資源 Resources	【過去】中の船宿, 宮の竹籠産業, 世木林の鮎漁, 沢田の分校, 上世木の筏中継地 【現在】天若湖, プラックパス, オオマリコケムシ, スプリングス日吉, 宇津峡公園	各地の伝承と場所, 田原のカッコスリ, 日吉神社の馬駆け神事, 胡麻の分水界, 同丸山, みとき屋及びその周辺, かやぶき音楽堂, 芦田新聞舗, 旧郵便局, その他名産物	保津川下り・伝統的な筏, 亀岡商工会館(近代建築)その他京都の都市文化等, 多数あり
空間・風景 Environment	府民の森ひよし, 郷土資料館及び移築民家 桂川の流水, 御所や烏居本へ運ばれた鮎, 筏及び木材	田原川・胡麻川ほか各支流, 日吉の山々, 田園風景等, 集落の街並み・土地利用, 植生景観, 胡麻の分水界, 同丸山ほか	Google Earthや流域図にみる山河と都市, 上流の集落景観・植生景観, 下流の都市景観・植生景観
メディア群 Media	大堰川, 移築民家 桂川, 桂川の水中環境(淡水魚等にとっての環境世界)	【過去】水没集落の街並み・土地利用, 植生景観 【現在】天若湖水面, 周辺の山並み, 植生景観とその季節変化, 日吉ダム及びスプリングスパーク	絵画(例:井上辰夫展, ひよしぬりえ, ライブペインティング), 写真(例:新保隆久展), インスタレーション(例:あかり〜), 染織(例:丹羽黒豆染), 映像(例:ドキュメンタリー「みずになったふるさと」), ワークショップ(例:杉山さんWS, 牛乳バック灯), 他

表-3 要素群のカテゴリー

	水没地域 (天若) 0	周辺地域 (日吉) 1	桂川流 域 2
人々	P(eople)-0	P-1	P-2
資源	R(esources)-0	R-1	R-2
空間・風 景	E(nvironment)-0	E-1	E-2

表-4 「あかりがつなぐ記憶」の構成要素

プログラムの概要	あかりがつなぐ記憶		
	水没した集落の家屋群の位置を割り出し, その直上の湖面にあかりを浮かべることによって, かつての村の姿を夜の湖面上に再現する。 併せてその風景を介したコミュニケーションの場をつくる。		
要素群	人々	資源	空間・風景
	水没集落住民(P-0) 流域NP0(P-2), 下流都市等からの観覧者(P-2)	水没集落の家屋位置・原環境(R-0), 流域美大の制作技術(R-2), ダム管理所の測量技術(R-2)	山々の稜線(E-0) 日吉ダム(E-0) 湖面(E-0)
メディア	フローティングライトの湖面設置によるインスタレーション(測量的な精度が必要)		

「あかりがつなぐ記憶」においては、「水没地域」「桂川流域」に関係する要素は見られるが、「周辺地域」を巻き込む要素に乏しいことがわかる。これを補うものとして、日吉地域の人々、資源、空間・環境を援用するプログラムを併催することも考えられる。試みに地元住民を巻き込んだ天若湖湖面利活用アイデア展を構想する（表-5）。

表-5 周辺地域を考慮したプログラム例の構成要素

プログラムの概要	地元住民を巻き込んだ天若湖湖面利活用アイデア展 (案)		
	ダムによって新しく生まれた公共空間である湖面について、地元住民、流域団体、アーティストなどによるWSや公募を通じて、創造的な利活用プランをまとめ、展示を行う。		
要素群	人々	資源	空間・風景
	地元住民 (P-1) 流域 NPO (P-2), 流域市民 (P-2), 外部アーティスト (P-2)	湖面 (R-0) 湖沼環境 (R-0) WS 会場・施設 (R-1) 展示会場 (R-1)	山々の稜線 (E-0) 日吉ダム (E-0) 天若湖そのもの (E-0)
メディア	パネル展示, PC (パワーポイントやCG), 模型など		

天若湖アートプロジェクトは、回数を重ねるにつれ知名度も上がり夏の風物詩として定着もしてきているが、現存する日吉地域からはこれを活用する動きは未だ出てきていない。上記のようなプログラムの分析によっても、メインプログラム「あかりがつなぐ記憶」における周辺地域との関わりの薄さが確認される。天若湖アートプロジェクトの目的（創造的な湖面利用の発見と流域市民の上流域への共感形成）から見ても、現在の上流域の生活と水との関わりへの注目は不可欠であり、今後のプログラム開発が期待される。

以上、プロジェクトの構成要素を地域性に応じて区分し、それを単位としたプログラムの評価と構想を試みた。この手法は桂川以外の流域連携、交流プログラムにおいても援用可能であろう。

5. おわりに

流域連携活動における「流域」は、具体的な課題（例えばダム建設の是非、水資源の利用、貴重種の保全など）を持つ「地元」と、多くの場合利害を異にしながらも、生命、財産と環境の保全といった実生活と結びついた関わりを持っている。流域の市民はその水系の利水、治水及び環境について、一定の当事者性を持つ。流域連携活動は市民にその当事者としての気づきを与える活動とも言える。

本事例においても、この流域に生きることの当事者性を主題化することが、アートプロジェクト全体に求心力を与えてきた。

同時にこれは多様なプログラムを展開する上での制約要因にもなってきた。「外部」からやってくるアーティストや観覧者が、自由な関わり方で地域に刺激を与えることが期待されている一般的なアートプロジェクトとは、異なるところである。この点については、本稿で行ったような地域性の評価に基づくアートマネジメントによって、流域課題を多様な観点から照らし出すプログラムを用意することが可能であると思われる。

アートプロジェクトであることによって可能になったものもある。天若湖アートプロジェクトには、ダム事業を推進し管理する側の人々も、それに批判的な活動をしている人々も参加している。党派的なものや、ダムの是非論を越えた議論や協力関係が可能になっていることについては、アートが介在していることが大きい。アートは、常識的な視点では捉えきれないものを、顕在化させ知覚可能にする。またそのアイデアの意外性は、既存の図式的理解から人々を引き離し、お互いをフラットな立場に立たせるのである。

淀川水系流域委員会の頓挫や原発事故等、近年は環境と生存を巡るさまざまな議論が、「3つの原則、7つのルール」が目指したような合意形成ではなく、出口の見えない対立の構図に取り込まれていくように見える。

風景は自然と生活文化の総合的な表現として、われわれに等しく語りかけうるものである。アートの方法によって風景の語りを人々に改めて開示することは、もう一度共感と合意の形成に向けての場をつくることに、繋がっていくのではないだろうか。

本事例には、市民社会に新しいコミュニケーションを惹起させる、アートとしてのランドスケープの可能性の端緒を見ることができるよう思う。

以上、天若湖アートプロジェクトと流域内コミュニケーションの可能性について考えてきたが、森林再生においてはどのようなコミュニケーションが行われているだろうか。森林ボランティアについていえば、活動家同士の情報交換は行われているものの、河川環境

保全の場に比べるとフィールドの孤立性が目立つように思われる。

カナディアン・モデルフォレスト・ネットワークのコンセプトは、小流域の森林を単位とし、そこでの各ステークホルダーが話し合い協働するというものであった。これは流域連携モデルに他ならないが、こうした要素は京都府のモデルフォレスト運動からは失われてしまっている。ここでは、企業と活動団体とフィールドのマッチング業務が行われているが、フィールドを超えて各プレイヤーの自由なコミュニケーションが行われているとは言い難い。

森林再生は林業や森林生態学に関わる者だけで可能になるものではない。都市と森と川のつながりと、その文化を作ってきた人的ネットワークの中で初めて生きるものである。森林再生の場面にも流域の観点と、すでに行われているコミュニケーションの蓄積を活かしていきたいものである。

補注及び引用文献

- 1) この間の経過は、水郷水都全国会議(2006)『20周年記念資料集「ふるさとづくり提言の時代」』に詳しい。
- 2) 水環境交流会が提唱する「3つの原則」とは、(1)自由な発言／(2)徹底した論議／(3)合意の形成。「7つのルール」とは、(1)参加者は自由な一市民として発言する／(2)参加者個人の見解は所属団体の公式見解としない／(3)特定個人・団体のつるしあげは行わない／(4)議論はフェアプレイの精神で行う／(5)議論を進めるに当たっては、実証的なデータを尊重する／(6)問題の所在を明確にした上で、合意をめざす／(7)現在係争中の問題は、客観的な立場で事例として扱う(共に「原典：みずとみどり研究会」)。各参加者が組織的背景によって口をつぐまざるを得ない状況を打破し、率直に意見交換できる「場づくり」のルールである。
- 3) 王尾和寿・鈴木雅和(2002)：国土数値情報による流域を単位とした土地利用変化の解析：ランドスケープ研究 65(5)：pp. 861-864、など
- 4) 鳥越皓之(1984)「補論 方法としての環境史」(鳥越ほか編：水と人の環境史 琵琶湖報告

書：お茶の水書房：pp. 322-341)

- 5) 生活環境主義の環境社会学の有力な論者である嘉田由紀子(現滋賀県知事)の活動など。
- 6) 佐藤裕美子・熊谷洋一(2003)：鶴見川流域の地域環境保全における市民活動団体及びネットワーク組織に関する研究：ランドスケープ研究 66(5)：pp. 815-818
- 7) 八木健太郎・竹田直樹(2010)：日本におけるパブリックアートの変化に関する考察：環境芸術学会論文集 (9)：pp. 65-70
- 8) 大阪商業大学原田禎夫ゼミ(2011)：トラベルコスト法による天若湖アートプロジェクトの評価：天若湖アートプロジェクト2010事業報告書：pp. 53-76
- 9) 京都造形芸術大学でランドスケープデザインを専攻していた小椋新平さん(当時1年生)の応募案。
- 10) アサヒ・アート・フェスティバル。(財)アサヒビール芸術文化財団によるコミュニティ・アートへの助成。それ以降は(財)ダム水源地域環境整備センター(2006～2008)、(財)河川環境管理財団(2009～)等からの助成を得て実施している。

本稿は、下村泰史・佐藤久恵(2012)：風景づくりと流域市民のコミュニケーション 天若湖アートプロジェクト：ランドスケープ研究 75(5)：pp. 655-660、をベースに下村が加筆及び編集を行ったものです。

天若湖アートプロジェクト 2012 ご案内

あかりがつなぐ記憶

日時：2012年8月4日(土)、8日5日(日)

2晩、日没から日の出まで

場所：京都府南丹市、日吉ダム周辺

内容：「あかりがつなぐ記憶」は、日吉ダム・天若湖全体を舞台にした壮大なアートです。8月の夜、2晩だけ、水没した天若集落(約120戸)の家々のあかりが、ダム湖面に浮かびます。時空を超える幻想的なあかりをぜひ体験してください。

※関連イベント等詳細については、下記ホームページにてご確認ください。

<http://amawakaap.exblog.jp/>

センター事務局よりお知らせ

2012年3月6日に理事会が開催され、2012年5月10日をもって村田源理事が理事長を退任、藤田昇理事が理事長に就任することが決ま

りました。理事長就任に際し藤田理事よりご挨拶をいただきましたので、掲載をさせていただきます。

新理事長就任に際して 藤田 昇

3月6日の理事会で、村田理事長と交代して、新しく理事長に選ばれました。私の専門は植物生態学で、日本の森林に関心をもっています。森林再生支援センターが目的としている日本の森林再生には現在3つの大きな課題があると感じています。一つは裸地の緑化で、工事等によって生じた裸地にどう森林を回復させるかです。一昔前は、林道横の崖に緑のペンキを塗ったりしたことがありましたが、さすがにそういう愚行はなくなりました。緑化には適木適所と郷土種という問題があります。岩盤がでた場所に潜在自然植生の極相種であるとしてシイを植えてすべて枯らしたというような植林がかつてありましたが、植林にはそれぞれの立地に適した樹種の植栽が必要です。また、樹木は分布地域によって変異がありますので、その地域の遺伝子資源を攪乱しないように、その地域の変異をもった郷土種の植栽が必要です。郷土種の認識は一般化してきていますが、実際の植樹になるとまだまだです。

二つには、里山の問題です。これには、人為と森林遷移が関係します。日本は雨の多い森林国ですので、放っておくと自然に森林が成立します。戦後に多くあったはげ山は植林しなくても森林に回復しました。森林は攪乱がなければ極相林に遷移します。ススキ原はアカマツ林に、アカマツ林はシイ林にというように。薪や炭に代わって化石燃料が使われ出して、放置された里山は遷移が進み、東山ではシイ林が優占してきました。自然に任せるのか、景観を保つのか、里山の絶滅危惧植物を保全するのか、考え方は分かれます。里山の重要性は認識されてきましたが、かつての里山的景観を残そうとすると、攪乱を加える人為的努力が必要です。現在の里山はかつての里山とは変貌しています。かつての里山景観に完全に戻すことは難しいですが、どのような里山景観が望ましく、現実性があるのでしょうか。木質ペレットの利用は、地球温暖化と里山の経済問題を解決しようという一つの方策です。

三つには、人工林の問題です。戦後、拡大一斉造林事業によって、日本の森林の半分近くが、スギ、ヒノキ、カラマツなどの人工林に置き換えられました。しかし、安い外材の流通で、これらの人工林は放置されています。いろいろ問題は指摘されており、広葉樹植林などが試みられていますが、拡大一斉造林は国策として事業が行われたため、きちんとした総括や対策には至っていません。

3つの課題に共通する問題として、シカの食害問題があります。各地域で対策は打たれていますが、成功には至っていません。これも、シカの増えるまま自然に任せよとシカを徹底的に減らせと考え方は分かれますが、京都市北山の林床植生はシカの食害によって大きく変化しており、今までの林床植生を守るとするならば、時間的余裕は少ないです。

森林再生支援センターは、森林再生について貢献するのが役割です。人材、資金的に制約はありますが、可能な範囲で今後も努力したいと思いますので、会員の皆さんの積極的な参加をお願いします。

～最近の森林再生支援センターの活動～

○「観察の森づくり」に講師を派遣

2012年7月8日(日)に法然院裏山の善気山(京都市・東山)で行われた「観察の森づくり」(フィールドソサイエティ主催)へ講師を派遣しました。今回は山に設置した防鹿柵の中でどんな実生が育っているかを子供たちと一緒に調べました。

なお、10月13日にはナラ枯れ後の植樹指導も行う予定です。

○彩都法面樹林化指導

彩都は大阪平野北端部、箕面市から茨木市にまたがる最後の巨大開発地です。ここで樹林化＝森づくりを進めることとなりました。今年の1月から6月までにわたって、この巨大法面で工事を担当する造園業者、都市機構の方々を対象に樹林化指導を行いました。

○寿長生の郷散策道整備ほか

放置されてきた里山を多くの人々が訪れる魅力のある生きた里山へと変えていくために、森に手を入れ、散策道整備を行いました。大津市にある和菓子メーカー叶匠寿庵さんからの依頼です。

○京都伝統文化の森推進協議会林相改善事業

京都市・清水山で4年間にわたってすすめてきた林相改善事業を平成23年度も実施しました。放置ヒノキ林の山頂部では群状間伐と広葉樹植栽を行ってきましたが、今年度は山頂部の標識植栽。石組をした上で木を植えました。これ以外にはコジイ林の間伐後の落葉広葉樹、アカガシ、モミを主とする補植事業を行っています。平成24年度はこの清水山地域以外にも將軍塚周辺においても事業を計画する予定です。東山の風景を大きく変えつつあります。

○四季彩の森整備事業・鹿ヶ谷

京都市・大文字山の南側の谷とここに伸びる支尾根で大量のナラ枯れが発生しましたが、この跡地を中心に落葉広葉樹を主とする樹種による補植を計画し、現場指導を行いました。ここでは京都市三山森林景観保全・再生ガイドラインに基づく調査を実施し、適地適木原則で樹種組合せを検討するとともに、見え方にも配慮した計画によって事業は実施されました。防鹿対策も行っています。

○桂坂巨大法面岩盤樹林化計画・事業実施

京都市・桂坂の北西端に斜面長10mが13段に及ぶ巨大法面があり、風化した岩盤がむき出し状態になっていました。ここの樹林化を緊急雇用対策事業で行いました。岩盤緑化は技術的にもきわめて困難なものですが、ここではシカ、サル of 食害圧もあります。技術的には樹木生育箇所となる岩盤風化部の抽出とそこでの苗木活着補助工、苗木植栽、及び防鹿対策用の竹製防鹿柵の設置を行いました。計画、事業実施ともに高度な技術を要する中で、緊急雇用で採用した13名の方々には熱心に仕事に取り組んでいただきました。成果は今後多くの見学者によって実証されるかもしれません。

○京の苗木生産供給体制整備の支援

地域遺伝子資源保全のためには植樹において地域性苗木を適用することが必須ですが、これまで十分量・種数の地域性苗木が市場に供給されることはありませんでした。京都市ではこの生産者育成に3年前から取り組み、本年4月に生産者による協議会設立が行われました。苗木は2年目となっており、早いものは来年から出荷可能です。本センターが京都市市林業振興課より計画・指導を全面受託してきました。

○三井寺の森林林相改善・活用計画

東山と一体となっている大津側の三井寺の森林は戦後の熱心な造林によって7割をヒノキ林へと変えてきました。しかしながら、近年のシカ害等の影響は森の不健康さを強調するものでもありました。ここでは、ドイツ式のヒノキ造林を抜本的に見直し、適地適木原則に立ち返ることを原則として、さまざまな角度から森のあり方についての再検討を行っています。カシノナガキクイムシによるコジイ枯死の危惧はここでは直接災害にまでつながる危険性も見逃せません。事業はこれからです。

センター活動へのお問い合わせ等は下記まで

特定非営利活動法人 森林再生支援センター事務局

〒603-8145 京都市北区小山堀池町28-5

TEL 075-211-4229 FAX(TEL兼用) 075-432-0026

E-mail: info@crm.net URL: http://www.crm.net